

家族

中原中也

朝な朝な、東の空の紫色の雲の中に、一つの家族がありました。

まずお婆さんが目を覚まし、家中のお掃除を始めます。恰度その時女中は台所で、竈の下を焚き付けています。お婆さんはお掃除が好きで、大好きで、時偶女中がお掃除をしようものなら直ぐまた自分がやりなおすというふうでした。とってこのお婆さんは、何もそれ以上に邪慳だということでもなく、六ヶ敷屋^{むづし}¹でもないのです。そういうわけで、朝な朝な、此のお家^{うち}では箒の音がする時に、台所では竈の中で、とろとろと火が燃えてるのであります。

間もなく此の家^{うち}のお母さんは目を覚まして、鏡台の前で髪を結います。子供は床の中で目を覚まして、その鏡台のある隣りの部屋で、お母さんが頭の生地を綺麗にするために使う布が、小さな金盥の中の熱いお湯に漬けられては絞られる時の、お湯の滴の音を聞いています。やがてお父さんが目を覚まして、咳払いや煙草盆の音を立て始めると、急に家中活気を呈して来ます。空をわたって行く鳥の啼声までが、急にテムポを速めるように思われました。

やがて齒をみがいて、御飯を食べて洋服を着ると、子供は学校に、お父さんはお役所へ行くのであります。

さてその学校が何処にあるやら、そのお役所が何処にあるやら、それは雲

¹ 「難し屋」と同じ。

の中のことで分りません。

だが、朝な朝な、東の空の紫の雲の中に、此のお家があるということは確かだ、皆さんが、やがて大きくなって、皆さんのお父さんも亡くなり、お婆さんは云うに及ばず、お母さんも亡くなって、皆さんが今度はお父さんになった時には、それがほんとだと分るのです。

(一九三四・一一・一五)

テキスト：https://www.aozora.gr.jp/cards/000026/files/55932_56010.html

(旧仮名を新仮名に変更)

朗 読 (参考)：<http://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd276.html>

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

九 ジョバンニの切符

ごととごとととととと汽車はきらびやかな^{りんこう}燐光の川の岸を^{すす}進みました。向こう
の方の^{まど}窓を見ると、野原はまるで^{げんとう}幻燈のようでした。百も千もの大小さまざま
まの^{さんかくひょう}三角標、その大きなものの上には赤い点々をうった^{そくりょうばた}測量旗も見え、
^{のほら}野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん^{あつ}集まってぼおっと青白い
^{きり}霧のよう、そこからか、またはもっと向こうからか、ときどきさまざまの形
のぼんやりした^{のろし}狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな^{ききょう}桔梗いろのそら
にうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった^{きれい}綺麗な風は、ばらのに
おいでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう^{りんご}苹果はおはじめてでしょう」向こうの^{せき}席の
^{とうだいかんしゅ}燈台看守がいつか^{きん}黄金と^{べに}紅でうつくしくいろどられた大きな^{りんご}苹果を^お落とさな
いように^{りょうて}両手で^{ひざ}膝の上にかかえていました。

「おや、どっから来たのですか。^{りっぱ}立派ですねえ。ここらではこんな^{りんご}苹果がで
きるのですか」青年はほんとうにびっくりしたらしく、^{とうだいかんしゅ}燈台看守の^{りょうて}両手にか
かえられた一もりの^{りんご}苹果を、^め眼を^{ほそ}細くしたり^{くび}首をまげたりしながら、われを
^{わす}忘れてながめていました。

「いや、まあおとりください。どうか、まあおとりください」

青年は一つとってジョバンニたちの方をちょっと見ました。

「さあ、^む向こうの^{ぼっ}坊ちゃんがた。いかがですか。おとりください」

ジョバンニは坊^{ぼっ}ちゃんといわれたので、すこししゃくにさわってだまって
いましたが、カムパネルラは、

「ありがとう」と言^いいました。

すると青年は自分でとって一つずつ二人に送^{おく}ってよこしましたので、ジョ
バンニも立^たって、ありがとうと言^いいました。

燈台看守^{とうだいかんしゅ}はやっと両腕^{りょううで}があいたので、こんどは自分で一つずつ睡^{ねむ}っている
姉弟^{きょうだい}の膝^{ひざ}にそっと置^おきました。

テキスト：https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/43737_19215.html

朗 読 (参考)：<https://www.youtube.com/watch?v=RmZsqUo5GCg>

トロッコ

芥川龍之介

或^{ある}夕方、――それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外^{ほか}は何処^{どこ}を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端^{はし}にあるトロッコをpushした。トロッコは三人の力が揃^{そろ}うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、――トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

その内^{けん}にかれこれ十間程来ると、線路の勾配^{こうばい}が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなった。どうかすれば車と一しょに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好^よいと思ったから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初^{おもむ}徐ろに、それから見る見る勢^{いきおい}よく、一息に線路を下^{くだ}り出した。その途端につき当りの風景は、忽^{たちま}ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当^{はくぼ}る薄暮の風、足の下に躍^{おど}るトロッコの動揺、――良平は殆^{ほとん}ど有頂天^{うちょうてん}になった。

しかしトロッコは二三分^{のち}の後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ」

良平は年下の二人と一しょに、又トロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後^{うしろ}には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

テキスト：https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/43016_16836.html

朗 読（参考）：<http://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd248.html>